



幸田・青木邸の前の大きな棕の木



[蕎麦の酒]収載の青木玉著「手もちの時間」(講談社文庫・品切れ)



青木玉の、お蕎麦で飲む酒

「茹で上げたばかりの蕎麦は僅かに甘く薬味をからめて食べるつゆの味は濃い。これほど口に残らないうま味で酒を含めば、ほのかに酔い、時間をかけて飲む宴会、晩酌の重い酒とはちがう軽い酒だけれど、お茶とお菓子にない満足感がある。ここから人はついでに用を足すか、家に向うか、お蕎麦の酒というもの、何かと何かの間に挟まれた面白い時間だ。蕎麦を思うと酒が欲しくなり、酒を思えば蕎麦の味にひかれる。これは何とも味な仲である。」(青木玉「蕎麦の酒」)

蕎麦屋の酒は摘まみ、酒、蕎麦とリズムがある。そこが粋だと昔から言われている。これを青木玉は蕎麦、つゆ、薬味の本質も見事に捕まえながら、「軽い酒」と言っている。さすがは、幸田露伴の孫、そして幸田文の娘である。彼女は母親と共に小石川の棕の大木の前の家に住み、1994年「小石川の家」で芸術選奨文部大臣賞受賞した。

ほしひかる

エッセイスト・江戸ソバリエ認定委員長、著書に「お蕎麦のレッスン」「江戸蕎麦めぐり」「蕎麦王国埼玉」など多数、講演やテレビ出演などで活躍、各種団体から感謝状を授与される。